

共同研究プロジェクト紹介 多文化共生社会における日本語教育研究 サブプロジェクト：日本語の基本語彙に関する研究 日本語の基本語彙に関する研究

| | |
|-----|---|
| 著者 | 島村 直己 |
| 雑誌名 | 国語研プロジェクトレビュー |
| 巻 | 3 |
| 号 | 3 |
| ページ | 133-141 |
| 発行年 | 2013-03 |
| URL | http://doi.org/10.15084/00000717 |

日本語の基本語彙に関する研究

Research on Basic Vocabulary for Learners of Japanese

島村 直己 (SHIMAMURA Naomi)

1. はじめに

本稿では、サブプロジェクト「日本語の基本語彙に関する研究」の概略を述べる。

やっていることは、きわめて明快なことがらである。まず、教育基本語彙のデータベースを作った。これには20年近くを要したが、成果は2冊の国立国語研究所報告（国立国語研究所（2001）と国立国語研究所（2009））に報告した。そして、本プロジェクトでは、そのデータベースにもとづいて語彙選定を行い、外国人の日本語学習者のための基本語辞典を作成し、また、児童・生徒の基本語彙の理解度を調査している。以下、この順に述べる。

2. 教育基本語彙のデータベース

現場の教師に語彙指導の重要性を訴えても、教育基本語彙が定まっていないから難しいといわれる。しかし、本当にそうなのだろうか。

教育基本語彙と名付けられた著作物はいくつか存在する。それを知らないのだろうか。あるいは、知っていても、その活用の仕方が分からないのだろうか。

そこで、教育基本語彙の活用の仕方については、大学で国語科教育の教育法を教えている人たちに任せることにして、筆者としては、いくつかある教育基本語彙をデータベース化することを行った。それが、国立国語研究所（2001）に掲載している教育基本語彙データベースである。この報告書の付録CD-ROMにはその機械可読データが収録されているが、これは、次の7つの教育基本語彙をデータベース化したものである。総語数は、27,234語である。以下、語数は、データベースに登録した語の数を示す。

① 阪本教育基本語彙

阪本（1958）に掲載されている語彙である。A（小学校1～3学年）、B（小学校4～6学年）、C（中学校）の3つの学習段階に分けられている。語数は、24,740語である。

② 新阪本教育基本語彙

阪本（1984）に掲載されている語彙である。①の阪本教育基本語彙の改訂版である。A、B、Cの学習段階の表示は、阪本教育基本語彙と同じである。語数は、20,864語である。

③ 田中教育基本語彙

田中（1956）に掲載されている語彙である。それぞれの語に小学校1～6学年までの指導段階が与えられている。語数は、3,456語である。

④ 池原教育基本語彙

池原（1957）に掲載されている語彙である。小学校低学年（1～3学年）で指導する語彙が選定されている。語数は、2,989語である。

⑤ 児言研教育基本語彙

児童言語研究会（1962）に「児言研国語科教育基本語い・第一次試案」として掲載されている語彙である。小・中学校を対象とする。語数は、1,843語である。

⑥ 中央教育基本語彙

中央教育研究所（1984）に掲載されている語彙である。小学校用である。語数は、4,336語である。

⑦ 国語研教育基本語彙

国立国語研究所（1984）に掲載されている語彙である。①～⑥の教育基本語彙と違って、外国人の日本語教育のための教育基本語彙として選定されたものである。語数は、6,103語である。

この教育基本語彙データベースは、西尾ら（1986）を用いることによって、表記、品詞などの見出しの立て方が統一して示されており、また、山田ら（1995）に従って語種情報を、そして、国立国語研究所（1964）による分類番号が付与されていて、言語学的にも高い水準のものとなっている。

その後、国立国語研究所（2004）の出版にともない、分類番号を改めて、教育基本語彙データベースの改訂を行った。その際、次による語彙配当の情報を付けた。

| | |
|---------------|-----------|
| 阪本の A ランクのもの | → 1：低学年配当 |
| 新阪本の A ランクのもの | → 1：低学年配当 |
| 田中で 1～3 学年のもの | → 1：低学年配当 |
| 池原にあるもの | → 1：低学年配当 |
| 阪本で C ランクのもの | → 3：中学校配当 |
| 新阪本で C ランクのもの | → 3：中学校配当 |
| 児言研で中学校のもの | → 3：中学校配当 |
| それ以外のもの | → 2：高学年配当 |

このように語彙配当を決めて得られた集計結果は、次のようになる。

| | |
|-------|-------------------|
| 低学年配当 | 6,865 語 (25.2%) |
| 高学年配当 | 8,620 語 (31.7%) |
| 中学校配当 | 11,749 語 (43.1%) |
| 合 計 | 27,234 語 (100.0%) |

国立国語研究所 (2009) には、付属 CD-ROM に新旧 2 つの教育基本語彙データベースが収録されている。これは、分類番号に国立国語研究所 (1964) を使ったか国立国語研究所 (2004) を使ったかの違いだけである。

教育基本語彙データベースの改訂と並行して日本語教育の教育基本語彙のデータベースも作り、上記 CD-ROM に同梱した。これは、次の 6 種の教育基本語彙をデータベース化したものである。

(1) 国語研教育基本語彙

国立国語研究所 (1984) に掲載されている語彙である。教育基本語彙データベースに登録したものと同様である。語数は、6,103 語である。

(2) 初級 500 語

国立国語研究所日本語教育センター第二研究室 (1979) に掲載されている語彙である。語数は、534 語である。

(3) 七種比較対照表

国立国語研究所 (1982) に掲載されている語彙である。語数は、6,195 語である。

(4) 工藤教育基本語彙

工藤 (1996) に掲載されている語彙である。その後、1999 年に、ひつじ書房から市販本が出版されている。本データベースでは、市販本を用いた。語数は、6,050 語である。

(5) 木幡教育基本語彙

木幡 (1998) に掲載されている語彙である。語数は、7,502 語である。

(6) 玉村教育基本語彙

玉村 (2003) に掲載されている語彙である。語数は、4,043 語である。

日本語教育の基本語彙の評価をするために、教育基本語彙データベースで設けた語彙配当の情報とクロスすると、それぞれ次のようになる。

(1) 国語研基本語彙

| | |
|-------|------------------|
| 低学年配当 | 3,082 語 (50.5%) |
| 高学年配当 | 2,130 語 (34.9%) |
| 中学校配当 | 891 語 (14.6%) |
| 合 計 | 6,103 語 (100.0%) |

(2) 初級 500 語

| | |
|-------|----------------|
| 低学年配当 | 502 語 (94.0%) |
| 高学年配当 | 20 語 (3.7%) |
| 中学校配当 | 2 語 (0.4%) |
| そ の 他 | 10 語 (1.9%) |
| 合 計 | 534 語 (100.0%) |

(3) 七種比較対照表

| | |
|-------|------------------|
| 低学年配当 | 3,260 語 (52.7%) |
| 高学年配当 | 1,693 語 (27.3%) |
| 中学校配当 | 664 語 (10.7%) |
| その他 | 578 語 (9.3%) |
| 合計 | 6,195 語 (100.0%) |

(4) 工藤教育基本語彙

| | |
|-------|------------------|
| 低学年配当 | 3,590 語 (59.4%) |
| 高学年配当 | 1,376 語 (22.7%) |
| 中学校配当 | 384 語 (6.3%) |
| その他 | 700 語 (11.6%) |
| 合計 | 6,050 語 (100.0%) |

(5) 木幡教育基本語彙

| | |
|-------|------------------|
| 低学年配当 | 4,679 語 (62.4%) |
| 高学年配当 | 1,185 語 (15.8%) |
| 中学校配当 | 303 語 (4.0%) |
| その他 | 1,335 語 (17.8%) |
| 合計 | 7,502 語 (100.0%) |

(6) 玉村教育基本語彙

| | |
|-------|------------------|
| 低学年配当 | 2,419 語 (59.8%) |
| 高学年配当 | 1,100 語 (27.2%) |
| 中学校配当 | 387 語 (9.6%) |
| その他 | 137 語 (3.4%) |
| 合計 | 4,043 語 (100.0%) |

これらの数字をどう見るかは、人によって見解が異なるだろうが、日本語教育の教育基本語彙が必ずしも教育基本語彙データベースの低学年配当の語を主にしているわけではなく、高学年配当、中学校配当の語も含んでいること、そして、教育基本語彙データベースに登録されていない語（「その他」とした語）も少なからず含まれていることが分かる。

3. 日本語基本語辞典

日本語教育の基本語彙 2,000 語の意味記述を行うことを目的としている。先ず始めに、当時の国立国語研究所日本語教育センター第二研究室で作成した入門用の初級 500 語の意味記述を行い、報告書を作成した。島村編（2009）がそれである。

この辞典の特長としては、「語法」「語源」「文化」「表記」などのコラムを随所に設けたことにつける。意味記述としては、分かりやすく、用例を多くあげるという基本方針を立てたが、それ以外に目新しいところはない。

それらのコラムの中でも特に「語法」に力を入れた。それは筆者の個人的な経験による。30年ほど前に、筆者は福武書店（現ベネッセコーポレーション）の『チャレンジ国語辞典』の編集に携わったことがある。当時の国語辞典の関心は、見出しに標準表記、すなわち標準的だと思われる漢字表記を付けるかどうかということにあった。『チャレンジ国語辞典』にも標準表記を付けようということで作業を行ったのだが、その目的は達成されたとは言いがたい。この担当の編集委員が筆者でなかったため、その間の事情には通じていないが、今にして思えば、残念な点である。

筆者が担当したのは、特色と漢字欄であった。特色というのは、編集委員会の内輪の用語で、なにか辞書に特色となるものを考えるという役割のことである。そこで考えたのが、類義語の意味解説、同音異義語の用法の説明をコラム化することであった（漢字欄にも同訓異字の用法のコラムなどいくつか特色を考えたが、ここでは省略する）。発売されると、これ

が受けた。それを思い出し、今回は語法的なことをコラム化することを考えた。「語源」「文化」「表記」などというものは、他の分担者の発案である。幸い他の分担者たちの賛同を得られたので、執筆分担した語のそれぞれに、各自の判断でこれらのコラムを書いた（必ずしもすべての語に付けている訳ではない）。

『チャレンジ国語辞典』を刊行してから20年余りの間に、国語辞典の世界では標準表記を付けるということから、語法的なことに注記を付けるということへと関心が大きく変化した。その代表例が『明鏡国語辞典』である。筆者らの『日本語基本語辞典』もその流れに逆らわないようにした。後、英和辞典、特に中学生用の英和辞典で文法解説をしたものが売れている。語法、文法的なことがらに注目をすることは、辞書界の流れなのであろう。

このようにして、先にあげた報告書の第1集をまとめたのであるが、第2集の報告書を編集するにあたって、意味記述に1つ特色を考えた。それは、複数の表記、複数の品詞表示を持つ語を、単一の表記、単一の品詞表示を持つように分解することである。これの主唱者は、飛田良文氏である。

飛田氏は『三省堂国語辞典』の編者でもある。『三省堂国語辞典』は、表記が異なると、見出しを変えている。筆者らの『日本語基本語辞典』では、その方針を表記ばかりでなく、品詞にまで徹底しようとしたのである。このようにして作った第2集の報告書は、島村ら(2011)である。

例をあげて説明しよう。最初は、表記に関するものである。

あたたかい（温かい）[形]

① 水温が冷たくも熱くもなく、皮膚に心地よく感じられる。

「温かい風呂に入ってゆっくり休みたい」「温かいお茶をください」

② 心が通じ合って優しい気持ちで接する状態。

「結婚したら、温かい家庭を作りたい」「新入生を温かい目で見守る」

あたたかい（暖かい）[形]

気温が寒くも暑くもなく、からだに心地よく感じられる。

「今年の冬は暖かいね」「気候が温暖で暖かい国に住みたい」

次は、品詞に関する例である。

べんり（便利）[名・形動]

I [名]

自分の生活や行動にとって役立つ利点があること。都合がよいこと。

「ここは、どこへ行くにも便利がいい場所だ」「この家は、便利を第一にして設計されている」

II [形動]

目的を果たすのに都合がよい。利点がある。役に立つ。

「都会は活動するのに便利な所だ」「我が家の台所は、やっと便利な調理器具がそろった」
「ここは、車があると便利です」「これは便利な辞書だ」

これは1つの実験である。しかし、この方針を『日本語基本語辞典』で対象とする2,000語全体に対して徹底したとき、はたしてどのようなものができるのか、興味深い実験であるといえよう。

4. 語彙習得

テストは、教育基本語彙データベースからランダムに100語を抽出して作成した。

テストの方法として、理解度を調査した。これは、1語1語について、意味を知っているかどうかをたずね、知っていると答えた者の割合を得点とするものである。

調査対象は、埼玉県さいたま市の小・中学校各2校の児童・生徒1,800名である。調査時期は、2011年2・3月である。

まず、男女をあわせた全体について学年別に理解度の平均値を見ることにしよう。図1を参照されたい。小学1年生ですでに29.4%であるのに、それほどの向上はなく、小学3年生が39.3%で、小学6年生が57.3%で、中学3年生でも74.8%にすぎない。そして、図2に示すように、これには性差はほとんど認められない。

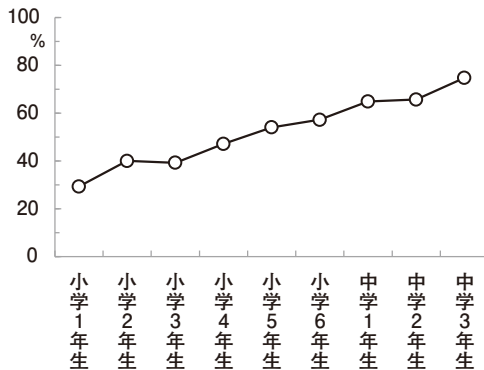


図1 理解度の推移

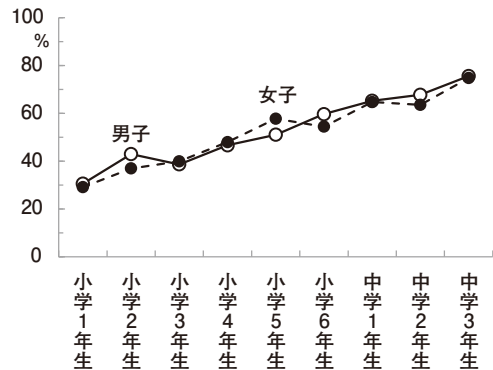


図2 理解度の推移—性別—

そこで、語彙の属性別に見ることにする。この100語の属性は、次のようになっている。

- 語彙配当
 - 低学年配当 25 語
 - 高学年配当 36 語
 - 中学校配当 39 語

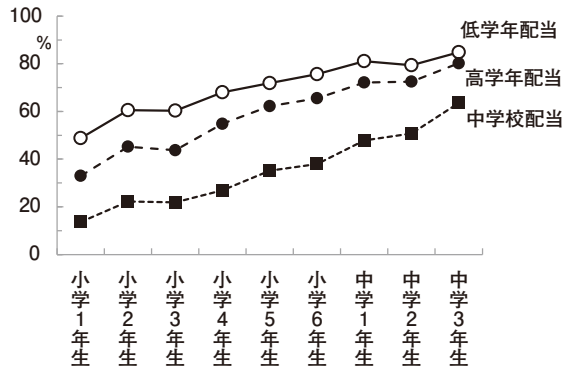


図3 理解度の推移—語彙配当別—

- 品詞
 - 名詞 69 語
 - 動詞 21 語
 - その他 10 語

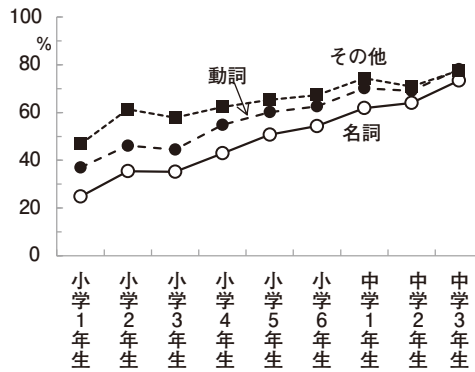


図4 理解度の推移—品詞別—

- 語種
 - 和語 50 語
 - 漢語 44 語
 - その他 6 語

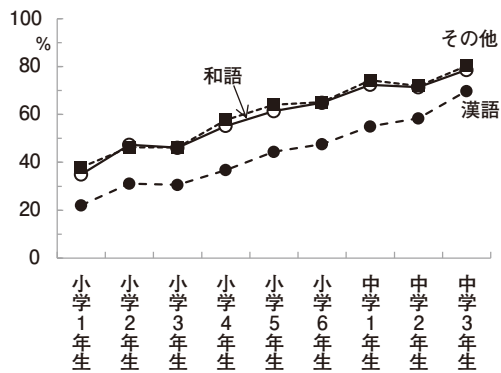


図5 理解度の推移—語種別—

語彙の配当段階別に理解度を見ると、図3に示すように、やはり下の段階に配当されている語彙ほど理解度が高い。品詞別に見ると、図4に示すように、名詞の理解度が低い。そして、語種別に見ると、図5に示すように、漢語の理解度が低い。児童・生徒は漢語名詞の理解に弱点を持っているということがいえよう。

●参考文献●

- 中央教育研究所(1984)『学習基本語彙』東京：中央教育研究所。
 池原植雄(1957)『国語教育のための基本語体系』大阪：六月社。
 児童言語研究会(1962)『言語要素指導』東京：明治図書。
 木幡智美(1998)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査Ⅱ』横浜国立大学大学院教育学研究科。
 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』東京：秀英出版。
 国立国語研究所(1982)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』東京：大蔵省印刷局。
 国立国語研究所(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』東京：秀英出版。
 国立国語研究所(2001)『教育基本語彙の基本的研究—教育基本語彙データベースの作成—』東京：明治書院。
 国立国語研究所(2004)『分類語彙表—増補改訂版—』東京：大日本図書。
 国立国語研究所(2009)『教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—』東京：明治書院。
 国立国語研究所日本語教育センター第二研究室(1979)『日本語教育語彙資料(2)—低学年初級 500語—(五十音順)』東京：国立国語研究所日本語教育センター第二研究室。
 工藤真由美(1996)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』横浜：横浜国立大学教育学部工藤真由美研究室。
 工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』東京：ひつじ書房。
 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(編)(1986)『岩波国語辞典 第4版』東京：岩波書店。
 阪本一郎(1958)『教育基本語彙』東京：牧書店。
 阪本一郎(1984)『新教育基本語彙』東京：学芸図書。
 島村直己(編)(2009)『日本語基本語辞典—初級 500語—(試行版)』東京：国立国語研究所日本語教育基盤情報センター。
 島村直己・佐藤亮一・正保勇・飛田良文(2011)『日本語基本語辞典—基本 501位～1000位—(試行版)』東京：国立国語研究所日本語教育研究・情報センター。
 玉村文郎(2003)「中級用語彙—基本 4000語—」『日本語教育』116: 5-28。
 田中久直(1956)『学習基本語彙』東京：新光閣書店。
 山田俊雄・築島裕・小林芳規・白藤禮幸(編)(1995)『新潮国語辞典 第2版』東京：新潮社。

《要旨》 本稿では、サブプロジェクト「日本語の基本語彙に関する研究」の概略を述べる。

先ず、教育基本語彙のデータベースについて説明した。これは、厳密には、このサブプロジェクトに先行するプロジェクトの成果だが、このサブプロジェクトはこのデータベースに多くを負っているため、ここで説明した。

次いで、日本語基本語辞典の話題を取り上げた。これは、基本 2000 語の意味分析を行

うものである。すでに基本 1000 語の意味分析を終了し、2 冊の報告書にまとめた。今年度中に第 3 冊目まで出す予定である。

最後に、児童・生徒を対象にした基本語彙の理解度の調査の報告を行った。児童・生徒の属性別、語彙の属性別に分析したが、児童・生徒は、漢語名詞の理解に弱点を持っていることが明らかとなった。

Abstract: This paper outlines the sub-project “Research on basic vocabulary for learners of Japanese.”

First, I describe the database of fundamental vocabulary for use in education. Strictly speaking, this database is a product not of this sub-project but of an earlier project. However, since the current sub-project owes much to this database, I describe it in this paper.

Second, I consider the dictionary of Japanese fundamental vocabulary, which analyzes 2,000 basic words of Japanese. We have already analyzed the meanings of 1,000 fundamental words and presented the results in two reports. During the current fiscal year we plan to issue a third report.

Finally, I report on a study of the degree to which elementary- and secondary-school children understand the meanings of fundamental vocabulary items. Various analyses of the results show that children have difficulty with the meanings of Sino-Japanese nouns.

島村 直己 (しまむら・なおみ)

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター上級研究員。教育学修士（東京教育大学）。国立国語研究所研究員、主任研究官、室長、主任研究員を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『児童・生徒の常用漢字の習得』（国立国語研究所報告 95、共著、東京書籍、1988）、『常用漢字の習得と指導一付・分類学習漢字表一』（国立国語研究所報告 106、共著、東京書籍、1994）、『教育基本語彙の基本的研究—教育基本語彙データベースの作成—』（国立国語研究所報告 117、単著、明治書院、2001）、『教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—』（国立国語研究所報告 127、単著、明治書院、2009）『チャレンジ国語辞典』（共編、福武書店、1991）。

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」

サブプロジェクト「日本語の基本語彙に関する研究」

サブプロジェクトリーダー 島村直己

(国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 上級研究員)

プロジェクトの概要

本サブプロジェクトでは、外国人の日本語学習者のための基本語辞典の作成と日本人学習者の語彙力の調査を行っている。他に、近代日本人のリテラシーに関する歴史的な研究も、このサブプロジェクトの中で行っている。